新編俳諧文集　全

へ 5
1930

蕪庵蟹守大人輯

新編俳諧文集

江戸書林

野村新兵衛梓

甲斐の蟹守ぬしは誹諧の道に遊びて
其かみ我師の雪中庵を出て京洛に
のぼり又西三千里を[illegible]雁屋に
二大家を訪ひて[illegible]なる事
月に花に遊ぶる事も昔の一葉紙のやうなる歳
ぬるほとに年をかさね[illegible]花園
雅韻の香をもとめ[illegible]をとりてとりかし
て其芳をあつめて其物共を問ひて
東海道を[illegible]山の

韻をうつし是を山陰に催し吟詠に綴き
たる諧家の流をも探りて新編
の集となるものは若は一人を趣とし美
なる舞は一筆毎に誹諧の語を集め
としいくたびしれなれども牛に汗し棟に
充つ近年誹諧の集の毘にて丹青
あるものは閑をえて其家の象に
筆を兼ね筆力の妙ある中にもやむをえて
其人の事の醜業を藉を出して現さんや

ねみれば得るをも梨棗の備
あらわしを四方に弘めなし
祖翁の文の稿いたし出すまじ地に
落さる私禅翁の人と作

文政三年かのえたつのみなつき
記す丹の自寿王序

毎よ俳諧てふものゝ中にあり俳席もの大さ乃
はさ俗にてあるなく崑崙の雲路渝蜻蜒蓬萊ぶ
間てかゝ狩る寸心の光を書ふにおもしし
手向ち花をさゝるもやら俗欺の我俳に
混し是をいやしむ事くい三下和ろ資をを
わきまへ志らさる俗眼乃嬉ぶせるあそぶ
ときなき志ともあき俗し志ら翁の名あ
あ拙く文章れ言々加へたうきうらしそ
掛よ身に意の光輝ほかくるとのあかふ衫

文字に文字をかく之畫中に画あるのたとへ
あるよし元禄のむかし所々社あるひハ寺子の
志作さまざまの数をあつめ世にひろく梓行して
風流文選と号し今甲斐の國の世にも
於ける文時の一傑人なり殊に大にその志を
継して中むかし志らず傳のことはなとかして の
文をあつめ風流文選乃ごとくかきつけ
ちらしあるをあつめ一旦撰び編さいまして
ちらし集めいまにうつしおきて さきに手

其ふるき数行に書あつめ志をあるひは綴みあすも
表紙乃おもし かくる錦の糸書のうらに
云霞なきあとに他は元時にはくあさき
志しるしとなりて墨とるおもきもおほくあるとき
見しに管はうまにも芳し にかはらす
かやうに編をにきはかに林に教ふ
さらふさきて 針志 画題のいさかし
まして 玉に集合て 茶にて集めて香にて
見に水象のよう屋をよくいたし さんかうて を

素も俳諧之經緯にして撰ひ出し給ひしも
也嘆とかゝや家名ゝおのおのに筆とる

文政八酉のとし

[illegible]

新編俳諧文集上

蕪菴蟹守著

凡例

一大和文章伝られ来りおほかる中に俳諧の一格を貞徳翁の定られしより芭蕉翁も亦一家の風を興し門人に二三部の撰あり それが中にも風俗文選を則ともよく人の識るところなり

一俳諧の諸集世にみてりといへどもむかしより俳諧文集と唱ふるは古来絶て著せるものなし おのれ嚮におもひおこすことありて西に赴きし比経歴の折から諸家にて求て数章を志るし

累るゝ是を以て全部に編なさんとならば
さはかり集ふるはなへし志ありといへとも
また蠹乃巣となし果んもほいなきまゝ文
類に増補して文選よりこなたの古人を輯
録し當時の作者をも書載されたるやうなく

一 編のやうみちをなれるちなみ季

一 此編古今の人を霄塊して卿年暦の次第を
なりゆと以へとも文章の體裁分類をなさ侍
を諸辞ひとつくに掲るはなからゆゑなり

一 拙度別に発句撰上木の折から敢て一雙なる
ものにもあらすと以へとも此編も亦撰なるよし

やもへしとて例の書房が心ひきさんひらき
れて五月雨の頃のつれつれさはえもあらみ志ゝ
達者経ぬ流連の一ところを未をきれす
ありかたき僅に硯の海に乱入られ波ぬせられ紀
んの行とゝのへさるかくもわきんかし

新編俳諧文集上

目録

駒墳集序　京 蘭更
高舘懐古　江戸 蓼太
桃李集序　京 蕪村
丹布家比鳥序　カヒ 葛里
虎画讃　京 重厚
新小菟序　江戸 巣兆
何似集序　江戸 成美
姨捨山賦　イセ 樗良
二十歌仙序　ヲハリ 暁臺
芭蕉翁真蹟序　ヲハリ 士朗
其唐松後序　カヒ 敲水
茶摺小木序　ムツ 乙二
十時庵再勧進帖序　江戸 道彦
無名鳥題言　葛里

新編俳諧文集下

目録

端津久李　京 月居
瓢蔵銘　京 雪雄
犬坊主傳　ミカハ 卓池
送友人西遊序　カヒ 蟹守
鍾辭　セッツ 桐栖
息杖辨　江戸 豪山
毛蓼説　アキ 路宅
二十歌仙序　カハチ 来耜
炭説　イセ 椿堂
茶隠書画帖序　アキ 篤老
芙蓉扇賦　キシウ 瀾古
其夕女句帖序　アキ 玄蛙
豆太鼓頌　江戸 寥松
紀行　アキ 鳳郎
名月辭　アキ 圭雨
書画帖跋　曾隠

俳諧古今説　イセ 井里
秋月序詞　江戸 鶯笠
雨中ある詞　禾慕
夕顔頌　少翁
朝起論　カヒ 真貫
送鷹園主東遊序　カヒ 静菅
自誡　江戸 護物
住吉御田記　鶯笠
憎鳥辭　蟠守

雑文　ハリマ 泥中
槙小庭記　寥松
紀行　蟠守
蟬説　カヒ 一飛
國見平記　カヒ 真洞
小築記　江戸 對山
折箏銘　寥松

新編俳諧文集上　華庵蟠守著

駒墳集序　蘭更

拄のかみを世銭の翁甲斐ヶ根に杖をとゞめしなさつ
奥ふち氷とけそめしより春も日にまりて月にうつり
て行朝の春にたちなく霧の間乃やまとりこころさゝ
旅の哀ぬつく　暫時百景の雰囲なハ古人ともまた
腸をそゝく山里の雲れ住の宿まる鬼の皮ふち裂
つくれと童子ならも慰めらむゐるよし風流さなく
なる中耳馬蹄る玉のよりとゝろあこさぬしもわかれ
されハかの高孫を得ぬとし兇子載不活の正風を

わふき遠近の好士の句〳〵をもとめて駒墳集を
選んてこれを告る三車主人の懇意をめくみて
老懶おもひ畔をかうき十か一をおらに塗抹するのミ

姨捨山賦

樗良

更科の月明らかなる秋八月八日の夜姨捨山に登りて
鏡臺山を冠りとなしけのむらふにたてり筑摩川範やかに
麓をめくり雲井のちりを名のこして水上の月をやとせは
四毎の秋はきをひく山の松風に志らくめくり宝か池
桂か池更科川をく流稲荷山八幡の里川中島を
おもひあはせ居ふ見えかくれ吹風精神をせめて
出しく見るもの目かうこえてあはれなり粥をすすりて寝を
姨捨ぞ志らく石上にんをまつのみ

高館懐古

蓼太

前後の戎衣一にあさ海り平泉のさかんなるを見るに
大路に車の行かひも絶るあるも左右の家々も軒むかひ
あしらひちまりていとめでたし城のことくにあつまれ流
人も稀かくしらるるてふいかち行らんもえうれはたけき
もののふを金鞍にまたかりたるやうなる女房ハ銀簪を
かさしは糸にまよる柳の此所をみとりに琴の音を
たちきけは風のほかに伽羅乃此所にしも袖をぬらすこそし

裳をかゝく猶四方の風色を吟して夜の実ハもろと
もに楽しむものをと和泉式部か離情をつくし
衣川ハたかくまてこそ流をうち渡れと源の重之か
涙をそゝく夜の詠ころも猶さと月の山ハなかれ耳
湧白山ハ雲れあけ浪のをわかぬ國見ん山宝根山たち
志祢山ハ花の雲にそひえいなせの森りハ時鳥れの奈
せ鳴なりいさみの里ハ末広志くみ金鶏山ハ暁を
報して時まの津ゝみを和ある耳似たりえ毛越寺
の堂塔四十余禅房五百余字中尊寺金色堂経
堂吉祥堂をあらふる神社佛閣山ゝ日に映し月に
かゝやくなかんつく衣その柵ハ義士和泉三郎の忠に

して碧流岸をうち水上ハ、に落て高波にそゝなかり
源廷尉耳かゝしつきたる庭殺しくハ衆星れ水底を
遶るか如く志ゝ多立かしこにまろつまいて秀衡一門の栄
耀更にいふへくもあらね口をあまんまなにハ鳳を裂
麟をほふる園をよろこそしむるにハ炎天乃梅花
玄冬のさくらもまえてこのときにおくれしとよそ開ふ
鶴ハ九皐にちまさぬ千秋を飄亀ハ十符の浦に
万代をこゝふきしもたゝ今まて

山そひ衣川なかれより高館の風

二十歌仙序

暁臺

呉道玄龍を画て鱗甲うごき忽烟霧起て雨をくだしぬ烟霧龍を生せしや龍烟霧をむかへしや道玄何そ龍を画ん龍も又其人を待てあらはるゝものか一龍奇をあらはしひとり妙をあらはし奇なる妙なり其龍天下の宝なるがゆゑを真龍といふ桃青二十哥仙ハ画龍なるや画龍ありてのち真龍あり冬の日あら野仙これなり世上今画龍を見ずして何者の其真龍をなさ免む

桃李集序

蕪村

此ほとりひとよさにまかん四時四まきありし歌仙秋をうせぬ夜をこめのこりぬ其人請て木にあらんといふ其人制て曰此哥仙ありてやゝ年月を経たりおそらくは流行におくれなんと予笑て曰俳諧の活達なるや実に流行ありて流行なしたとへハ一圓郭に添ふて人を追ふて走るがごとし先ニ走るものハ後れたるものを追ふに似たり流行の先後何を以て分つべけんや只日々におのれが胸懐をうつし出てけふは昨日のわれにあらで翌日ハ又あすの俳諧なり題してそまく夫

あらそふ人里めぐりよめともそこしなし　山梔所集
仍大意客例

芭蕉翁真跡序

士朗

本間老人の家に芭蕉翁の記念草あり荒海に浴て
白川の木末の月を佗たまひしより稲刈りけし霜
枕の薄きはさように菊の匂ひに寒く海よひなふ
誠人の庵阿弥陀坊を訪ひ来てあはれと吹秋風
みなみのかなしみ草は伴りねむりし　重衡に典侍の局よ
りいれなに聞えひの髪をくひ切てこれを記念に
法縁せよとて葉り　縁人はさ承けたまはりて　法のかしこへとも
まゐらせ筆のかはらそぞ　法硯を出されよりされば
筆の跡あらてかなしみ草にあるへきなものとなりしを
あはれ法らぬもありつれも此行しか　杉雅の薬袋
下草に埋もれるの光来なきとて　やうて　桜木に
ちりつけていよいよ不浄を除え法なり　老人の深切にそ

丹府家比鳥序

葛里

それ俳諧ところの色なり　たとへば月草のうつるを
移ろひやすく　鏡のうけのよく物をうつすめし
それが中の不易あり流行　またしもしとくに
らんさむるとも定なるをかの造物者の無尽

花なれをあはれみしかくて見にさへ心ゆ感ある
すかれハおのけなくも天骨なくもらぬ篆書
色に流出るわさなり書案されハ尾張の士朗ハ
那古野の背に小葎ぬ箒をそめて流行の色を
わかちこれの蹇瑞を時々の意味村屋をそゝき
て不易の心を流出せりさて其名をよくきのあさう
ある色をえらしめとしえ言葉近江人いひ芭蕉翁
篆のめてたき紀いろく嬉きれあられなる風情まて
おのかこゝろのほうにやもとめかんわかめて出し色
乃書として川そもかの俳諧の色せとしのま
さかん人ともおのれの底なきうらやくあらんにし

和泉寺て帰年手を染るもの

其唐松集後序

鼓氷

人は名利の為に使はるゝ身となりては鶴
髪と成りて老の浪よせ来る志わかれぬ習ひあるを
遠近庵のあるしか其唐松集の編まれは名を
求るにもあらす文利を貪るにもあらす俳諧をも
いふへきにやさるを知らぬ人々の口さかなきをも書ら
ら孫にてもなく世の中にいて友とせんにたまれ唐松
の下涼しき志をめてぬ人をわらひしかりと研堂の
志ある人に筆を染るものなりし

虎畫讃

重厚

虎ハ五百歳に齢ありて山獣の長たるよし由緒かりとも
武士の筆先をおそるゝ事なく其掌大に動かし
されとたまく狗子を喰ふときは忽碎かれけれ
をもて狗子は盧の酒とも以ふめる彼の野ろに
馬碎木の茶ある事似されとも必しも我ならり
こゝに落て終に地獄の底に賣られたれ赤
鬼の憤鼻もうらみたる事ゆゑ落
しむ

茶摺小木集序

乙二

そも茶湯ありしさまのはわかし东風我晴窓
梦裁て吹落せ江湖白鳥の塗とつくりし碎仙も
天暦の帝の滋野内侍か遊ふへき人や待らんと詠し
名句も枯野をうけ出る翁のあそれも旅に死ん越
人の影も池塘春草に恵連を思ひ出せし名詩も
呂翁か嚢中の枕とうりて黄粱を炊く間に榮華を見
しも杞里紀王十夢のうちに真珠を数へ換ふも
まさ我茶のあけ湯の闘鶏野の霧も茶おとあつらし
まさもの衣わらし菓子妓指に溺田の浮橋をうけて

そこらさまよひありきて岡の堂佛幻庵の古き跡を
訪ふあるじの僧に几に憑りて嗒焉としておもしぬ
菱子やをらさしよりて俳諧の一ふしを問ふ主に
曰く詩にハ梅にあるかも菊すり小木公と待事梅より
あちぬそも俳句に於熟雅致新奇をふくめりもの茶
もり小木をさりく深く工案のたましけとせんやうな
かき消しうせぬ菱も又けぬぬわそれ江淹か彩色せ
ほそかの文藻まなくさうんあるかぬく茶の雲の
遊子様をあらくへて盧仝か七碗腋下平清風を
生し暁臺か旅のくるの茶一盃の湯生涯淮の人か
うつみめてさらん俳集やあふく海の川浪月とする
たえて世を照らし菱子かあけりきんき志のふか山乃
豊志のあさうら然やも

新小遊序　巣兆

和田ちかのおはく居て毛の陰におとひしくも
ここもひしらひあとりみやこの多ちの中にもふくらうにたき
ふそ待り頃にあらそれぬまてを序あらまもいふあるそ人の
在し入給へもしてすものく数千笑え待りしかそろ
去郊ふる何まかるすせやふかわらん川のたきありとて
坂東太郎とやさハ何れ業何の歌にも太郎あのあか
らましやを何きの年みか太郎関夏さもしろと

いふ事になりぬ當地の面目に侍へ侍りなんとて
東都旅宿乃什物に擬し侍ふよしをいひちらしぬれば
家の老翁手あはれなるものの稿をつゞりて讃小菴騰く
小菴以やうへわざとつゞりて相合集わせ發ふるまし
侍りしよ季よりしは以川を秋秋に志てうるさきさむ
しろもおぼつかりぬん彼空羽に斂を拍まと以へ條
八重霞におもひもよせ侍らんよりも浄名居士の
方丈に疲たらしまし侍るとてこのつひの菴みな執しさ
むしろとかきさ付侍るとありさもわしそあれ梅の花て
柳のぬきさしてめでたくなり出来てこれちまた菴とも
何むしろともなづけ侍りなん皆良冠者かくなるべき

なるべき条 撰者老節従念なくしかなへ見まゐらせ江戸
根元の因縁をよらせて世に名の巣兆濱舌

十時庵再建勧進帖序

道彦

羽根もつ鳥は月を世さらめいさうふ多の栖家をかへ
生と咲に狸の糞添を志るべしして何ぞも甚てかし
かしこや猿の纏掛ハもとより多の志ぬれ邦不詳
其性わるものくんの剥てなつきし一茶や以とより
そあり入し山の奥ていでしとさへおもひそみぬと
幻住老人の跡をたのみなれはるゝもとうなしや
さてかゝる天狗達が相撲とり場に定めてし小梅の

十時房一時に目録せしよりむなしくなりしこ
ろは蔵経のうらに集りしくも鐘鴨の鐘なり
しら須弥の上にわたりひとり安く登蓮が蓑さへ川
なみうけてかさなん囲炉裏もわすれそ鳥乃
埋めし粟の兄わての雲なちまちにきえて明るをもちす
らぬ懐紙うら白のしきそ見るとをは多きも口をし
けれいまわらひみて富士をむ雲を未申にあて日うけ
よき三笠町に二度のうつき庵せいとなむれるに
みなおりぬさて地の首方百七十坪家継のありして
一四間半に柳うらやゝ棒ひと木植の多きや根むに
見給ふし蓋深川古池の庵の最初山口素堂や

はしめに各竹萱板縄等持よりつゝ倒になるゝひ
寄進ありむ一条をもとゝ爾云

何袋集序

成美

ある庵に芭蕉の袋ありそれが名をはあくろ
とはふそもくは袋とをなふふくろなるふやと思ひ
しにいみしう彼素山家ゐ伊賀の國にあそひし
時好る夜机の中よりめでたき俳諧の懐紙をさがし
出るこれをのくしもて来しふくろなる事とそさる
俳ともも句袋とも思ふへきをわ何免かして　何
俳とよふ事を六条河原の院をゆ来の院と

書るおもかけみて志つも織物の文字をたちひなかう
例のふるみに落さる婉曲なるへしされハ
又は其の作者のこゝろをつみ入まてされハ清輔
船長のとりこみ始くろも嵐雪ハその外ふくろも
たゝこの中におかひらかくりいまはしいま清かし
さらすもあれと嚢を探る手とゞめなしとうや
こくおもぬまても此さゝハ其みちらはしを志るして
序をつくみ侍る

無名鳥集題言

葛里

春の日の花ハ木の芽をもよほし秋の月の草葉に露
にやどる其美景みむかへて万代もかはらなかしらう
うつろふおのつから天機ありてうれしくと志のひ紀
自遠ずられ始ひのむらいあり不二ハ山なとめてらし人
ものゝあはれし雲けしき雲の光らきまひずて人
のおとをもて以ひ及ほへきものゝ妻秋を更なり
夏の日は照りそらくもも多れ秋の涼しをみれも
只此山を見れハ世の中の困苦をも忘れ腹たつ
しさ事もなくてなん形くさみ常住な道あそひの
かくり川なり東坡居士乃赤壁たれを五十とせ
いきて百年の楽みありゆて志ちのしまれなる

とそかして梅の木あんとめる豈犹なしき庵の
うちに思ふとちまとゐし蓬莱もなく梅ひたゝん
ち実に玉の緒もゆるくなりにけん見めきひ乃
宿なり鶴の足長し鴨のあし短しよしや
その名形し人の心へ法名形しなすに繋して
只ちんしのは無何有の郷に遊ふよ

新編俳諧文集下　　蕪庵蟹守著

端つくり　　月居

獨ゐミつくして酔醒るに容あり梳をおしうごかして
いたく梅見さんと寝ておもふ干今夢のうちみ
浮粧ある佳人とうちかく季居ることおぼえしろ
のふらそかし此も忘れ家せめの羅浮山に梅ん
とて偉ひおほく誰さまく去り須りさのおと
花めでをすみちち入るめやしの栖なれや
咲みる雪梅れ木のうすもうえの碁

炭説

椿堂

栄省ある時の時錦帳の下草ある庵を結ぶけるん
まひつのこえあり又逢坂の関ハ誠あん續松乃
もえさし也ても歯をし即妙なるすハ云なれく
あり啞となりて據りて卧衣をさらて讎(アダ)を報ひ
られみに其用を達ハ歟炭ハ常ありある形よりふると
かの木のきし庵のをれとよみ法師を髣ふしさ
日みも黒しかるもころし

瓢藏銘

雪雄

いとまある時も遑なきときも人あたる座休事あるに
まかせて愛のたまし友故乃端に結ばれと書つけ給く
是娥窓のあるり燈の下に列ちらして手中す
森も記も是等ハ俳諧にあるものゝ為なりけり
酒掃の童僕錦にゆかれに是をつゝむやけとも耳に
なれかけも遇一ひらをも失ふことあれバ金玉なりとも
うしなふは如く思ひて罰して戒人のまた瓢源を
すに思ひて斯に瓢藏てふ物を堂前にかしらけ
つとし是を納めて童僕が煩ひを省くとおもひ即ち
に見て一言をかふつなりよりて銘して曰
汝口大ふして泄し易く臀軽ふして覆り

やましき画しかし若是残謬ハ月鼻
を書て先兒耳習へむ

三原茶隠書画帖序

篤老

昔あはれ大納言の年ふりせるひ前に大納言とよばれ
させ給ひて後京に行かよひ給ふ往還端午
仮家をなして茶を接待せしめ給ひてさはくの
浮世をわすれしを労せ給ひ其もののほかの比所の
さみとせさせ給ひしかは何やうの紙耳
かくさせ給ふをおほえられしに何とかけて紙物経
とも表題なきハ失念しそれ大納言の比家名なとも
聴耳乃ぬけぬへくあれともおのつからかくれもけ
まて三原茶隠此一巻をこしらへ夫より大納言に
あらは隠居にても仮家もまさに茶一きれも
接待ハせされとおふ人く詩人歌人画かき物書狂歌
師俳諧師を撰まんそれ其家の一蓋ゆるしかはりして
隠居の後に茶のみ伽にせんと守りかはる公家されむ
町人もうしや今と月にまつりんの札遣なるる
風流の志をとこ所よりたのまれはとおほかしかくて
篤老に巻紀を先勿論辞退せぬ事なくしみて
時ハ文政三年卯月篤老園の小庭の若葉に

花の露を筆にそゝきてしるしぬ

犬坊主傳

卓池

犬坊主といふはいつの人なるや姓氏何某の男と云
ことをしらず彼の竹林の徒なるへし夏ごと
蔓河の辺に足をとゞめしか佛瑠山の東なる蔵の
霊牙犬を抱て跡は人呼て犬坊主といふ
行かふ人の哀かりて打しく施なせし行まてと
わするゝわしらを狗抱とらんは食扎とても従ふ
またなるによしとて手あしもとらは市中にゐて
小路の芸を捨ひ月の夕へは野に嘯き花の
朝には山に狂ひ瓢としてあるはあくかるゝ日
高猫の桜の木やに人立かへりてこと問ひかけれ
ともさらに答へはなくよゝ待の心しれはと
あるへきる此人月花に對して無常迅速のさとり
なきを思ひとふしや犬に等しぬ事の庵も
むすへてそ跡をとけしいまむへきなら
やかて都率の雲の上にも生れ来んなとおもひ
やられ徳を慕はてなからんも本意
なくうれは後の志のひとしもなれとて其あら
ましをかれ付すものなりこそ

芙蓉扇賦

瀾古

予か別荘を竹楼と号して常に崔を覚ば其荘の以へし門扇の麓に控へて冨士ハ日にく見えてゆかしからぬの景及碍むに描なし琵琶湖の八景をもおさし省る懐しさを以て主人の捨舎なふみやと晴に清しめてこゝろつき待りやうて被変に移てまゐるに幾年も好りしこゝろふかかれハせんまへもなく思ひよるかくに枯芦を集て扉を飾り紙に扇ちて窓とぞし須磨の供屋の古庇の板に芙蓉扇をかけ附て

見れハ繼浩みちよきおもかし露よぞ紫帯添乙ぐ半伏に篭る開ハ松柏の蔭颯くとして更ぶ人繪の野をあらは夜に笑ふ漣白衛の蔭とならん拋紙こそくり冥情思ふよりもおすれも彼の破戸を立かけハ滄海渺くとして孔山うちつゝありて千さきかも遠きまあ季節るあれハ抱ゐるまたうそゝく人にも関あらぬ山の高嶽わすれて万天乃窓に好きりかゝり沖の友こゝみそ白好の影を立しても添其人に渋渓のうひをふさしむ名に夏の高師山浜名の橋の弦白虎関の恵りなかれ出猪の鼻の黄浪ハ尾

恙を風のおやなれバ似てさゞなみの捲帆ハ小
嶋のたゝ浪ゆらしく汲さみ手出て鈎をなす
蜑小舟を蛇籠杭瀬の邊に浮み旅人の目かハ
高瀬ふ今切の御帆を見送り宇布見山添の
回星ふりし浜楚けふ里は風をいとみ出さぬ
かくに靡く風情ありてあはれなり伊佐地さ
き浦の入江くらきむらさ松の汲手渡て
屈曲おのつから画るが如し村櫛村の渕讃ハ
細江女ケ浦ふ横きる是佐鳴し笠屋ふ於て
く覚なれさ佐も以とあらしく早磐の白根を
信濃路の山くをふまへて直なり　琴柱ふ
おける唐金ハ伊吹ふ佐鳴の琴弾ふ通ひ時を
以まく村烏ハ濱名の橋ゐ傍をうつし舘坂よ
かゝやく入日ゐ影も月ゐかゝりて浪ふむせほき
篝焚蜑か漁なりの巴か浮く有るたゞふも兵
この窓をとてあはやかふあらえて其気色現然
として美人の容顔粧ふ如く百景百興居る
すなはれハ撰者のも名ふおたれとも旅ふ
見たしも亭ふ籠り居て筆紙の以ふせきを遁れ
筐とかゐ数へふかゝせて肇の崩せん以川まても
揺ふまし出おすふのみ

送友人西遊序

蟠守

冨士になりて三月七日八日とも箱根越にて旅宿の
ところへおとつれし友人何某は駿河路や宇津乃
山こえしてか伊勢の御神に詣て大和めくり
なして出立を花のなかはしにと見送りぬ
そもそも能因法師がむかしをしたひ白川の
誉を跡し　彼上人ハ西に東に杖曳て
ふる見法師が名を傳ふ今猶俳諧を
たしなまれ世をも瓢箪のころくにまかせ行く奇
境陳迹を探んと思ひやられて羨し　不偶
歩文が山水の癖司馬氏が壮遊なれもまさく
おとろしとみる日比も大井川ハ歩わたりと
叫けとん人の背に負ハれて越るとて芥川
なるそとをうしなわれ鞠子の宿なととなく汁ハ
世に呼のえ名所名物として翁の奇骨もなの
つからる沈吟せられ折にふれてハ秋数奇なる
べしされハ芽野の花をよし那須の花祇園豆
腐ハ豆腐能味ひよく縁先かへるを来よせ
おくるを海なせきしかれに

其夕女句帖序

玄蛙

まこ又もえにとよみしも昔と古めかしとて
久方の天の橋立のかかり尋ぬる姉吾妻の果
までもふみや習んと思ふ人も先八雲立つ出
雲の神垣へ歩を運びまつる其夕か女ごころのふで紀
行も昔と甲斐ありしされハ家正風の道を踏
習んと思ふにも猿を憂えのと思ふ座かけれハ
風流の花と仰ぎへし焼籠庵の花さ清ハ不氷
あらまし思ふへからず此三子の酒落と仰ぐ庵し
史乃以あらすハ無辞なりしと思ひゆへかかる俳諧の
発句とこそ云ふべし数句を無理に作らんと思ふべ
からず明かにふれての自然に任すべし己れ上手と
思ふへからず又下手とも思ふまじくまつたゞ
此道の先達に逢ひて松を花より飾なる事にけも
あらひ又馬に吟ずまで捨の事も問ひて畫
綴ごころの二見浦玄紫の玉の数々を包ひ積て
浪花のむかしの糸つくしともなしたらんには
それ古池の水底を顕すの甲斐あるへきなれ
端に記しつゝをしまえてかくのことくするを
書てあたふ

蟬辞

桐栖

蛛の網抔にさはりても寂しきものよせ鼓詠也於軒にまぎれてちれさ紀虫の這出より蟬のゆかしさは翁みやしと哭へども茲へもをしいろの悪さは尉とのかせ聞とも囁くもせて只ちよく鷹出よりかゝをりしくかれを子鼠を殊るものなりん

豆太鼓頌

寥松

それ日影のうらうらと巷に袖なる嬰児のもてあそびにしけなるものを見るにかたちハ曲なうしてはものゝ如く似て柄あり裏と表となく凌帯を貫き墨に花形をおして飾とす豆に線つなげるを縁につけ振ちらせて撃て聲をなせる僅に春分発生の聲を象れるゝといへどもさかりしいと竹の淫靡なるにまさるのみやもなし是かの人の所謂鼗鼓のたぐひなるへけれと兼になるさいはまつらくやまとぬ字にいつ後をうつさはらつく字なして誠になさざれさせ慰なにうちなるものとこそ見世めまほしく乎九療の習もいとゞて師曠か耳をかるにも

あるは只与二郎か舞をまふに拍子よく合せ
島の千歳か扇とるよりもいとおもしろし たく
ましむくを五つの字あり そのふかさに豆を
なん世下手ありにも筆线あらされ煎たるに
さへ花さく春のゑをうけて是も采採て たゞちに
おもこそとさるをかなし次もやめ圃くさとなす
果て腐ることなく年々量り増の實の常なり
盡る日あるとしと志のつくく暗つしえ言かなく
なくふおもく

息杖辨

豪山

凡天地の間に労して功あるものハそのまゝ息杖なり
中にも搓杖を四枚六枚肩伊達看板に崇めハ
見ほましても野美醫の雇まてとなりてハ非命の亡
をも危ふきをあらはし檀門の撲棄にあり浮雲の富を思
はむにひとり油の質ハ竹にして直くあるをもてよきれ
とも多くハ片岨薮垣より撰出され不幸にも雲介に
役されまて其つとめや且にも景雲を拂ひて独不せ
穿ち夕にも亭丈を杖てるよしちかさ臂をかなく
又哲智にも赤銭に元の道に戻り志つかこまりに撲

ゆるされてこそ爰に其手へ渡さるもしるされたる末なり
雲の流を越し寒流渕瀬の川をわたりて辛苦
いたんのさなかしされと嚴冬に立帰酒の席にもあつ
かりも炎夏の喰搖扇も枝に添て其の季準
孫日拝んに雪飛事に出女の立ひさ投賽の賭
負勝ハかしこくさもあらんや果ハ引合喧
嘩のはしとなく稲妻の働して大業物の沙汰かし
是とも先汝よりかさねり拵る併え来由ころ乎
無心なるか其治りにかゝれるも是常用の利なれハ
なるへし吾こそひ世波の行路難を京摂の客とも
たよひ殊に足に堀ありて往来三百余里を皆海に
二百万歩の労をうくされハ日毎乎杠夫の難渋ハ皆な
益なしといへとも汝か動静を私ふに撞かさくみえたれ
徳をなして感せるか淺見実に辨を作ていさゝか汝
に対ふに彼拄杖子乃一則乎無門和尚か言をとりて
扶（タスケテ）過断橋水ニ伴帰無月村ニとありしハ汝か有労に
しるく是に悟入せそ貧富栄枯ハ一拄に任りせ
知り只其自然に任らんなとあるなるへし

紀行　　鳳郎

初秋のいと清らかなるめてし紀行にかき秋の
暮れ寂莫みな流れてひかり法をなして人の心

みてさ流る風月の境界より凡庸の人ハ味ふ沙
汰なしわれハ昔今共是非をいふへきにもあらぬ孫
とや川られつとせ御自楽事かうむり家園に奥
の邑くをめくりしを見まうりめる佗屋に年
入ること一秋のやとりをまとめしにおもしろしと御
しき年のほと六十路にちかき四五くらゐの席 唐きゝせ
御自写の本紙絵の糊こそ筆あるに紋所の
紙さ左右の画指をわたせたりんおもてある図会
めさしを蔵信られとあやしく立まよひて調度に
色を尽もさ流なり其質朴なる古風のおこそかなる
すいなしへいかなる長の果にもやせんいぬなるらう
志のせつなるにおもひやられて干鱈の白衣さ迄も若
菜つくせし山海の珍味にてなりぬ思ひをなし是
くなりしらへつく三年味噌の志ほからきにやうく
めし喰ひ仕舞ひなひ濁酒をとつきたしめ出
来ていふみも古代めける大なる盃をとり出し
かのをりこそやくしく作法をとりのへもの志川
うれしとおもふころにさ流ほと興ありたまりおほえ

毛蓼説

路宅

青帝一種を下して予か庭に生せしむるものあり
不謂毛蓼なり識者曰是一名馬蓼なりとぞ 又

或人ある蓼ハ大蓼の名にして毛蓼ハハブテコブラとも
いふと何れを是とし何れを非とせんや予ハこれ
褒貶にかゝはらん是非中の一塊に白根をおろ
して自一種の馬蓼となる又是なるんや非なるん
やさ鄙に去年あるかの人ハ六月を以閏とさとや
郭九峯か博士ハ八月をもて是に用ゆ亦しいふ
是を是とし非を非とせむや指をもて糸ふ
へきにあらハ非是を方正の説なりと咲ハいはく
是非の間に携ひて再ひ其背の大意にむかひ清
光に肺肝を曝しける蓼の種を蒔て更に是非
をいはゝ独馬蓼乎めしさ原をもりて馬蓼乎
めしさ原にたとふ

名月辞　圭雨

人こゝろはさとうしきるや上弦と月の名のつくは
より名ありしれふて宵をのとも中空は月のあらん
かきりる曠野沙村或ハ溪林海濱ここにかしこに
こゝろ遊ひ一秋く おもひくれ興を延る夏よ
たも見まれしき月の所くあれこる中耳ある
景晴をよみ芳原みちのく山の月なと諸生ある
ことにあはなる頃 思ひせられてたゝひなくなれ
うし其宵を人とゝもに文會てふるすをし

名月の辞といふを題して様に於のれこそものく
なにこゝろうあれ出んかさりなき月は思ひを
みしらき筆にかきとむる桂をやとすの笑ひそへ
うしく詫田姫のとうえおそろしとてやみぬ

二十歌仙序

来紀

人若き内は市中花霖は地にまよふむきを思ひ
老ては山林勝地にかくまんことを孫かふる
道の営ひにんをたつし茶島の清をあくさらん
うちあはするへし奇渕はうしいはくたうき

よそひといふみちをわしされともなほくより業本の
んを感して市中は交をさけ二とせあまりか先
難波津乃あたりなる本んは波の里の東に萱ふきたる
ものをつくりて大悲庵とよひそこに孫をとゞむと
きのつ依いよきさ人の見焙なり常日志うして
みちる常に菴のなみを歎し孫のあとのいさゝか
よかしんことのみ孫か志本なるに門人雅かれなる
見もくうしろ高齢を祝ひ曩に盃合といふ一集
あれまとひの二十あ仙を其弟二編にて老
その朋友門人か両吟をあつめしにて題号ハ
延寶の例にならふたるなそあり古体自よ

は裏なるをかなしみ俳よりは連なるを慕む
其徒なるといふをさるゝ也あまりに連句の
跡なるにても打まかへく亦意さはりハ文のかよ
ひみて例ひしもあれと俳諧の二國ハ巌なれ
波濤をこえてありしにあまたり実もし覚悟の
と成りに猶も早かりせそ我文こそ其門にあやふ
猶かれらなし一つの葉毎ふみまよそぬ志なき
あるらめさらしそ実からろのせちなるかくしある
都と川ともわすふへきなりや

書画帖跋

魯隠

文かくと以ふことを記すのゝかも其かくといふかくち
を写すのとうち五水十石筆みなまし ひいさす所に
も入とらや一句一連乃くちまさみも又ひとことをも
ふさとしかるへし春秋の日ふへあしきのあそれさ
山の姿みち流のこまやかなる花の香鳥み声の
なくしき学ひを見るし以めしてあるは旅の
つとふもきへき旅に出くみ去懐をねりきて心の神
の郁をとらむそれ風韻のたゝさいやしさけちめ
を見わかやうて其人かゝをさくおしもろゝ依

庵しを旅ほとに筆は絶を然てさしけんやる
るべきをさはちをらえやをわかる人哉

俳諧古今説

井里

夫俳諧は和歌の流にして其元連歌なり人皇
十二代景行天皇の御宇日本武尊東夷征伐志
たまひ甲斐の酒折にして新治筑波を出ていく夜か
寐つると續給へるにもとより翁かなへて夜
にはこゝの夜日には十日をとみこたへまつりける
是連歌乃濫觴なるやされとこは續哥にして哥
の文字も定まらす萬葉に佐保川の水をせき
入れし田をと尼のよめる歌に苅る早稲飯は
獨なりけると家持卿の下の句續けるを上下合て
是そ連歌の始なるべき又貫之の三十一文字の一
首を上の句と下の句とわかちて詠みかはすと後
村上天皇御製上の句に滋野内侍下の句をつけ
らまたりあるは平の清盛公下の句に璉蓮法師
上の句を継し類ひあまたありけれとかそへつくし
かたきなりこゝにかきもらしぬ扨ところ
ところ所謂狂連歌こそ今の俳諧にして松
永貞徳をしめて宗匠とあかめられ給ふ遠流

あらたまりて世に行はれ侍るものとなりぬ去るころ年あるとて松尾桃青ハ北村季吟の門に入て自正風をおこし中興一流の祖とあふかれまひ二千余人の門葉ありて夷洛都鄙にしたかひとむ草庵に一株の芭蕉あるを号て人おのつから芭蕉の翁と呼ふりになりぬ夫よりさはく変化をとなへともよろ変ハ此翁の流をしたひて俳諧するこそめでたけれさるに俳諧といふに三つあるべし雪月風流を風雅の辞なりとはしさるを俳諧の名にして洒落なるを風雅乃実なり此三つの物に及ハされハ世俗のたゝ云なるへしと支考かおもひたかるもむへなるかな俳諧を京より出し家すのとのミ思ひ古言をうつし梳言葉なとなへまるハむかしみなくて俳諧の名なしたとへハ満利ハ赤味噌より出し家ものなしあれと満利の汁にみそをくいへさ家ゝめしされともあなから古云をつくさ家ものといふ者もなく時によりて打手ふれてつくりたる蕎麦のかろく田舎味噌用ゐる所似たりともあるへし又みそ此世にもたら流行とせな家を評すゝ句に十團子も小粒になりぬ秋の風こゝろをうむかく味ひて俗中の俗をとなれ足之川に落さるやうさらく空

新しく出来るを俳道の本意にかなふ
あるべし さる俳諧に古今時代の差あり
其の差ちがひをよく弁て彼造化にしたがひ変化
こそみつけまほしきことゝふりふるれや おもひ
出るまゝにまかせ みしるき筆してかい付る猥ミ
あやふになん

雑文

泥中

むかし一条にてもと里橋を鬼の行とて家もなく
忠足を空にかへして赱とおそれに行べかへるを
学殿の尻を踏れまゐらせ押へふさかれて身を
わやはてさせぬれど猶みそれ鬼見えけりしとぞ
ようや見えけりとも何の益かあらん今の俳諧
をいふ人筆かれもこれもおくれたりや罵あふを
かの奇怪を好しものゝ孫末や ゆきかふとも
いふなるにこそ

秋月序詞

鶯笠

門守にて翁出る事にちょうこを立てり行ふ悔るに
その恵ふよとまもりつされと火嵐の皮ハむさし

とて手にも婦れは仏の鋒を抹香くさくきこへの
かしらはむを顎ふみ喜しなとおもふなるにさぬ
くなり熱田の杜の華は茶かくて来り弁せ
とて鳴らせは主とも尚やすは翁こなりて何たる
とらせむと問ふりれはまた莫に蓋へる

蓬莱は去年となりて秋の月

槙小庭記

寥松

さゝの葉しやと雪をはらふはせしかくさるの
あり庭のはちめにとてちいさき桂みすゝき四方の

人の根こしられしか其わきへかんてうにさゝのは心も
とめはそよけるさていろ白なるはかさね月の
花志られそめておろくと垣かつ葉はめをつくろふ年
むへも桂の氣色やすくもすゝしくよみはん萌の人
はつかさへ乃ふえも雪おもひおもりてひとききえ焼し
さも守のしるのを庵てめつきみつらてはらくし
さも波さまたるや其もやぎしさをみてさえるの
みとりはやうすなりをゆくちの玉たらしらせて
婦りそゝく琴未のまさきよりみもすゝくし
ましてやわき風さやうに吹されはかくへなるえの
き柳なとみおもろへちかくもふみひとつきあのまさ

きこえたれはしも人家の奥なるにこそ桂も
いまよりは桂の小庵といはましものをとうちつぶ
やきぬるにかたはらに居たる友人何かうしは
いへらく桂の字正しくは桂といふにも紙みなに
にいたりつ桂と書もちゐるならん源の納言は
かつらを丹波とせて板は杉の意とひて和名しるに
あへするされたりけるをあまたの枚なるもあくめかく
しけあるさたりしかと桂のつやうにおもひ立
ぬるは似つきもやらん桂ちからん流れきしく
桂のわさみやもらんあるしはきさとるにまめ
ありけるこそ小庵は茶のめらのとありてしるし茶を
さくかあのわみかまるしろにあまとやうは
しるを

雨中の詞

禾紫

おもしろは秋になりとも晴間なき形つき
秋のおもろなくさむ月は影もなく昼は輝く
日は光りもみえすしてやまのうつくしみせ枝
老の学きするやうにお風えなり只前栽の小萩
うえおそ思ひやられ此ともしく虫の音
しけく那季て像に肌寒しくなり常におもしろ

ぬるくもあられなほなとおもひかへさん
とおもふきつれ〳〵になりゆふくれを待と
なく秋に老ぬるはちからなくれて必らすしも
むかぬ命はよろつの家を何にかせん身乃
ためにおもふ人の為に見つかるへきと
いひし人もありきましてその下に住ひを
れは人のためならぬおのれか為めに多く
うる金を斬釜とりて呑喰ひの為にけつさと
されなそいとまれにさされておのれやしなふ
へき親たちをもやるみられはうかまつの末
なかくうしろめたくもおもひおく此の事

うらんうきへのちからぬそうふにそむくしくも
かく獨言はいふめれとそれもよしなしとおもふ
折しもまさ隣にさそふ為そこそちまちうち
おされてまうりしやらぬ

紀行　　　蟹守

文月のはしめつかた耳驚かす風もきつれ〳〵と
ありなく暑き日に旅とも覚えず遊様たちして
あはたゝしく杖曳つり明石の磯邊浦路を
たかに見なしてとかに経なく舞子の浜に至る

敦盛の御墓ありけるに行とふく神の宮拝ひ
めへ移えきたち次戸のとおりこちてむちかき
よりハ三の谷二の谷とかやかきへ峯の傍ふそや
夕日の名残高山寺かゝ里て嵩をしやとり
定めんとてゆうし壽帝寺を訪ふに至れ毎
身まかりて其営の今果しなと人に告るにそ
むなしき廟とありいひさしてせん方なし
けしき父に別れける御伴に人を質の宿を訪ひ
まつらんとおもてつるに失ともしの傍見ちぬ
旅人の何国の人ぞ御籠りなるを先やうか定て
あまたの人やいふあるしやかつまたふりならぬに

弟とけゝる僧良して云ふやう此門前の小
家あり是に志らぬと移をなへあうしの僧なれ
ハなりといひて子細かゝまし事共に加へ
里ぬとくくと教へあるを力にて杖突なかし
まくれとに竹の彰押ありて島の中にありや
しくもたて訪しきた侍妻戸よりさし覗き
ありけるに物あひさしたるなし弥と年比経むそち
まいりける親父志ちれたる報母て世ふふ修行
姥のもとに教さし寄かの火ともし掛数し
よりもつふさにいひ入れなれハ打悲さてさて
あるんなし日も都の人のうちえられしうき今日

の亡者の垂にありて病のうちにさまりとてあ
なれかましに其まゝうら人なも簡まゐらせし
そなかし幸ひ秋のすのも借わり君若しくとも
たなくへとゆふ暁しさ限なし妻も子も浜山へ
上り合図をとりまけ淋しきにならいふ変吟と
ほのかなり竈に薪さし之候られとわるしき
影つきまゝめしし種なく星あ乗し湯あるゝ
荒山風吹かれ吹なりして涼しさいふ
なりなくもや生る々地そなり深く候ぞ見る
岡もまゆ浦なとめるしめりして秋合も
まるりへ寄せやうし坂屋つり床のへて其の秋いもま録

さりしに吟ふる後に先ゆるし頼へと下さ波の床
とりてうをいふ孫ぬおのれも遠へて例よりもうない
せしら坂の祭まち波ひまくきた驚きさまとなく
足となく志さりふくしく摂八坂屋の猪鼻に来て
さくりあれとさる愛もなし程志くしかんく
として身も出しつれ人まろひ出て志そうな家
みもめしさましら今そ名のきそりぬ彼坂屋とな
思ひ志られくなかくし霧そうりも目をわるも
世に波浪寄し立ちへ里川のかた古くへ何もむかふ
見しく此浦の煙と消し人をかぞへあまりも
猶にてさなく一秋を子秋年ゆるしりて

秋とのゝ次广の衰をおほえけり
此川くされと宴も乃露　主翁々
とかくしふ漸拙の老き写凡の志らくかくされ時于
吉なりくる

夕顔頌

少翁

そも梅は春に先んじて雪のうちとも咲され
咲出れより花の兄といふなるへし朝㒵は夏
手をまれといふ露もかくる且のとこそ暦を動しぬれ
宴ふ夕㒵独夜ふへを待て咲出るをひとかく
なかぬえせものなりんかしつらく其ありさまを
見るに侘屋の畫荻垣なとに蔓の派延ひのあ
里ほ家されうかやさしき露の情あけるをや
よそなひしも此時なや又夕㒵の上の粧ひ除よ
かく波なりし事なりとおもしも似つらそもしし
されとそれは雲上の御法なしく於るかりとく
花街柳陌に出る推行女児に見らしかるへし
実を孫ひてそ形ふ米なしてふくらかなるさ清
藪菜師の茎麻の姿ふ似たりけれ神代にある
天の吉葛と唱て水を汲く火を防き渇を凌の
器なりしとやさ家を許田かためにに備瓢の名を

諸せしハちと門遠なるへしされと人の手ニ折
して竿ニかゝれる香具山ニ干なん白妙の衣と
見え風ニふかれてハ天津をとめか領巾振のとおや
しかれ是を鼎ニ熟すれハ味ひ甘く能く人の脾
胃をとゝのふ其功おほひなりといひつへしされハ
是の能なると実乃ふ来なるを取捨得失の常ち
なりけるちかくこそ

蟬説　一飛

蟬ニ数種あり其かたちいとちひさくして紫ち
色なる四五月ニ鳴あり是隆のくろ色ニして身ハ
ちゞみりとて瘂乃ぬく九十月ニ至り声凄急ニ喩そ
かしく鳴もあり色の青きあり蒲赤きあり都て
六七月最さかむなり又一種二月中ニ鳴あり蟪蛄と
いふ馬蜩より螗蛦等ニ至るまて十七八種猶其
類ひ名状挙てかそへかたし日ぐらしつくつく
法師ハ名を声の中ニふちやまくさをわけて兄を
いふのミなり同ニ又一つのあそれなるものあり唖
蟬といふ小児もゝ取て是ハ唖なりとそしとも
いなて捨るこそうたてけれ岩ニ松柏の本の字ニ
逍遥し寿を春秋と志りなして永日經とせん

身ハ寸余にたらずして大を羨まず自然の至楽を知る
世のなり業を吟とあまた米穀を盗み喰ふにもあらず
ひたすら安然として風を吸ひ露を飲て梢の高きに
飛ひ其身を清潔にしてかの世の塵にまじはり
目前の利のために心をつかひ蟷螂も志らず人を
笑ふに似たりされハこそ陸雲も五徳をわけられ
を賦し莊紫みをもうらやみしさんを詠れ古人の年
たけ耳にもあらずして鳴りおとろふるを惜ミからち
侍るも唐衣つきし〳〵かくして沈氏も玉のうて
あるは美人の髪を薄寸とも〳〵詠し日蓮上人の
御書にあけ蝉ふも鳴まする因縁そそもかれか為
生ある斉王のたちえ王を怨ミ死して化せるものも
ありとされハ怨るゝの冥犯のかれかれを上人
やりて添後あまふなんそもそも蝶とぬけから
ふとりにも彼乃鬼倩いまさとれさるものゝ説も
世の色も声もうつくしき虫なるを見るものあり

朝起論

真貫

能まさ紀菡萏(カンタン・ハチスツボミ)乃ひらくにも細くさき一葉ふたは葉を
おろひてやう〳〵日も茶やうにさし出る際を
数多の葉もあらしくと声あひさそひ名残

なく廣く流布しけるにや、しかも希見(めづらか)
なるも又もてはやさるゝにあふき草花の
色とても覚えさりき実蓮見んとするにもあらし
も鳳目さめしく起出る事このわらぬも猫
こち享保年中使例に在て曰、海老年狗寐
をも好みたまひし狗起して家に来りて淨
たる趣なるを世の中に似ひ習ひける狗寐狗起
の諸餘ある年棄たるなれば、是によりて狗寐
は人ころの拙きにや狗寐をさし、これと
いきたなしとて狗寝ともいふを、かの人登寝
して源貴せられし故ひに異なりと呼ともいふ

ハ鳥乃躁のいれかさかしかへん只ほのくらきに起きてむかへのこ
とを要とせぬ者これやまさり。鳳起朝せんとせしも
假寐(カリ)して既に賊害をまぬかれたる趙正卿ありさる
をいかにも狗起しと一時の云へることを後に以て
胡桝の九香なるとかいへるも天地と変じて美狗も
あのつもりし狗開して今もつて寐しもの、なか絶えて飢
あのかみそ自然の妙用にして所謂老子か名を
まれいひたるを絶さ　されも狗字大寐か狗開も
とりもに絶目さめ絶寐き性のまゝにして卿も
勤め以てさかしも鳥なきるに妄るにして寐やすみもや
以てん人見ぬ習ひ宴に至りて斥鷃大鵬のたけも

しかなりと歎じつゝおもひて恍惚としてぞ遂に物寐
の息もゆるやかに風起むとすれども何事か絶てこゝに
めぐらす事を知る人のことなるぞ此く天の物言と
等しいつもの何事か無ければ有無ハ啓蒙しと
いへど使者笑みて黙然と見えし蓮華の匂ひ
去るべき事宗治の網代寺にめしつかへ須臾志らばそ
ありに帝体されを法華円頓にこそ殆無為の
旨をさへかくぞしまつれと例の蒂（カラタチ）あまていふか
忽忘をたまふ乳のみ

吹上國見平記　真洞

今年弥生の末吹上の御社拝まんとて例の友
どちかたらひつれて物みよりまかるもぬける糸柳の
物朗人の駒の手綱引弛め見ゆるせて承見人
攀ちあれは志る人ありと枝とも更に山おろし
小屋曲志体桃をくゝれはあしくそひにしけ谷ふかく
栄へ去其体句ひして彼の三百七十余首の哥の傍
も去て思ひ添へられ営むとのこと知るても
覚得よりありけれそ遥に酒の御社そ
八重霞の御衣（ミゾ）ふかく山深く色の磯の棚引加

葉の御佛をかくさ塩の山の辰巳に利益の縁を
たれ日つ川の絶ぬ流を踏てなりそハ白雲千か
くれ寂寞として衆生濟度の海にあり高く石
和川はさとの驛をなかめおして題目石のむら
しを残し又されは川はわの世にかそ荒川の
名によそれ芦川のあしの縄さも源小ゝろく
櫻諸にかくれて鏡ほのかしさくさをのられ笛吹
釜無んくに波めをわくそし所糸のこなくさか
なゝよ里わきせ富士川の名にあかれてとき黒沢
山をめくりて舟客のうしろ影をかくし市
川の里ハ印紙荒に紙干なしへ家　時鳥待風情

なり都て山下添ひ流と常まくそて雪旌めくり添
雲のたゝまひ峰めくる鷲の嶺中なくゝえおもへ所
處悉美景を見ほも自然なるおもむかして志さるよ
感動せらは猶吹上の御山又上まて歌人もしぬ
太山木の繁くおしわひて先達の笠をかくし
なら九折にしらぬ巌峙ましら呼く人をはめ
水元ある志らし峰て石に跌ふ川として人の
志まへに付て谿に沢しそひよれハ谷風の吹く
吹上るそ実吹上とはなるへし

送鷹園主東遊序

静菅

一堂のうちにあそびて心を乾坤の外に遊ぶも
志むるものは風人のよには志を変なりされは
古人も幻術の歩一とを以それしるかの一童の
茶を売る翁にむかひまて無人の境に
かゝくさめを見ていはゆる竹馬に乗て郷里に帰る
あるは旅店に遇る方士の枕をかりてか刹那に
生涯の栄花をこゝろみしもさむれは粟飯のみえ
さるにおどろくかく悟あらひみなわらはたゞ一句に
魂の入て以さこし飛かめさまを以て招魂を
おもふにたとひ招魂の法を作るとも凡夫のたえ
やすく入つへきにあらねはたまさかに択ひ求んや
それは崑山の玉光りまうて恍惚として手書の
術をうしなふ夫百花を採て蜜となせ蜂の
其辛苦なるも自然の妙術なるへしいはんや俳諧の
修して至玄の圃に耕さんとするものなるその実
地にいたりてまねひあるは景情を求るすかたとは
はそれとも悠遠に揺さりけるのみなかりん
鷹園の主家に録るまゝありてなほみそ俳翁の
甚久しく年又甲斐の黒駒に鞍を加へて
古翁の細道のあとをたとり奥羽の勝槩を自得

せんするをおもさる嗟乎あれ擧におけるむかし
今に感しくところと景と寓せし精神日ほに
百倍して有聲の画乃妙ととまかゝきを写し得
たん豈よろこひさらんや予も我郷ひなこのかし
めしみと今を伏櫪の歎に沈みて庭前に繋る
駒のあさなゆふなはせめてる饑涸の吟もうなとおもひ
おもひす居ながら名區を想像しれと華を
遠たる風を捻るよりもよしなけまいさてさぬ
諸な君と都三島の間に翱翔してさし勝る
ところの遠しす有とある風光を弄ハ足りなん
必代かく心肉の肉百とりになしひて世をも嫌

舟さほらふすなられたとひ松島象潟の美景まて
かくしとも雲上の舟けうかりしも早く帰鞍
志さまへ公志なり

小築記

對山

それ家にありさるを松さえてひとく櫻をうゑん
うゑらわしといへるハ何かし入道とかくいひ
心にすこそおもしつらめそれらにもわくて
吾家の戸乃小庭にも太山木の何となかまの
僅に始くもやうちもとをうつしてちうひ作

垣にそかゝる其爪のまくろにたひまつハ事くるし
いふせくも覆ひもしに三疊のかくれ家をつくりて
觀修のいと清わるところをえるかに義素乃
墨の痕を志らふのこゝろより卓ひとつを爐縁
かくハりにおく是おのれか座に主とさらすゆゑ
そかりことわしき白炭のならさやきを志の
そのたよりにそいさゝか室棄あめれと風爐
手かへてまきしきをもちの乃をひハひとり
時うつりゆくことをなくさむにもれりとみゆるも
みられしたよく訪ふ人なとて点てまゐらする
へきよういもなくすし其さる人にしあれハ葉砂

とる事を望みて其年主客のまちちれさ清を
をかしともるも常く安女を貴ふかためのの
一室なれハなりされとあつおや嵐雪が宅
まししちめくりのたゝひにやと笑ふ人もあら
んかし去るみ南港小築といふハ卅余居のいそ
きぬるところ社友ゆかしこの四字を葉飄に
鐫なくりたるよりつひそれにまかせてかくよふ
るすみをなりぬまゝ澤姑をめつるかあまりの
戯ましに赤電子豬爪室なと書るもめつらし
きた似てさらに免図らしかゝれといふを無やや

自誡　　護物

世にあれと聚ふ人も世を棄るをまなふ人も
至りかたしと生涯たのしめのみ一筋にかゝも
らは思ひ及はさハいかなりも趣向を得や有へき
地下生ふるものハ地によりていふとゆ
るすも得れハそれなと業をうけ生るる世に
たとへぬこそそのむなしからぬそしめ
ありや舟中無有松に在虫なきも虫ハ
芋に生し菜虫も葉に生涯菜虫を虚実在
と以へるハ米をおさちと生るよりゆかりすし

たる蛾酒虫をまてハ猩々となるもをりし喫喰ふ
虫の類をなしまても蟭螟となる虫の嫁の
腱に巣をふむも生まれなから古心の木樵山
うつハ蟷螂の斧の柄も朽なん世を稼ひとらめも
宝に蚕の手業もいかにひなしく得世に苦し
められて身居虫のむしの声ありなのもあら
しーおし松の精になく蟬の声秋さへみえ草
に庵の傍に行羽集まて夜虫も螳螂の夕を
知らも蝋のくゝる塔も風に被き月に消て
天地の造化にゆるゝ世無為をなしなるすも
るとまんとせ欲せれとまよそれそのくさ

虫有槃持ニ悪癖の虫あり佛ニ慈悲の虫有伯夷
叔齊ハ忠信の虫ニかゝりて首陽ニ飢へ玉造の
小町ハ修羅の虫ニくはれてさらぬくにさすらふ
ゑるもさに後の虫はなせる業なりし何某の尾か
橋ニ枕し佐虫か蝶と化しさらし(?)おのれか
んおのれをさとれるにおそかんにおさとろうた後し
て忘れなるうさなるへ其ま虫よ虫世を秋の蝉
の声をたのしみても蝸牛の家を離れ俺さるの
虫の簑も雨もりて其ちのむ本清か寒くさる毎自
家路の子ら十篩にこけ扱し道を急くすら
後世の道みちへ行にくるしうなる屋とも

住吉御田記

鶯笠

文政七年甲申皐月二十八日なりけり住吉の神の
御田の祭そうけ給はるへく友とちにいさなはれてと
みに出たちぬ道すからみやひたる志らやさしき志寺
なれそいたりうし岸に立ぬ松の露さへ垂かゝり
て旅衣さへはるけき国とおもほえさるほとを
くしけるもいかにしるらしろさけあしくしやうて
かの宮居あたりを清なりさまりそち松の木の間もむら

きつところ人の袂にふきかれてそれともえええけるぬ
まて見そまの川慶若よぬる津文宮はしらさとちめ
くりなどして式のそしはるをまちみてりむらし
みちき神田と座しろとの御やに嶋きつ跡て
かりとの変せく志ほらひ幕むるかくしてみちの
場をまうけ土きと社務津もみち館侍は御と給ち
うちへまゐるにはさりしみちしかしつさ侍る参條
をりふして日は雲のかけもしまうみちあるさとを
ゆるし おいしまゐる時とのみさしめありとて 志やう
そくに供やうれ 出て調しのこ持ひいみしくそゝあや
かれ 志つて車をみるに こそうはし中央のとの小翠簾

まうく提うきてかしこみまゐらせ宮はう子まちち津とひ百味
の容盤を俱し三くの献の禮杯をまへむみきうりの
飯を難波の塩営をわつりまゐる御君の幣使かうふり
来まりておほやけの威儀を志めしなふありのふわそと
のを列歯ち僧侶の同なせしくまいりにこつらふな
めり志もつうこ年も離宮行司なといふへき侍りて
おのうちくまうけのむしろに御さま川さ雅楽を
まうまとて参持うありみまつりこの式ろとこ女てふ
ものをさらしまあるまた乳ちみさとのかはまさけ
のわつりも志られる倒ありとそとさまの みやひ年
ほやうふるの中にみつし 免きてさそりともおほえ

ぬもやうらひつて青紙うち着みて はなちさる市女笠の
うへのかさをうち黄なる衣もて かざれる左眉形に
誰にせり茶ちひのにほやかなるわかく出紙通り
なるさへいとなまめかしきを形勢の袴守ちのさねに
られなみのうらめづらしくみえうすき袴もさけ
帯結うへ手すかし 襷綴下ちにかけて志らしと
きもちはまつる神も袴さしとやえそなれちらん
田楽法師のあとにつきてかれ出たるいとつきなく
そ衆徒白布の如く免にその具いろ紀しらさら
やうなるみしきれおほくちうしろまにおり脇の
太刀をはさみ白柄の長刀の鞘をまうしおほ下結

かしらかろとふさにかくして ともの ふあまたしたかへ 襷
の毛ふりみだれきてゆらくとわたむそうに将乃
出立したる法師ものふかり乞杖をとりて傘そろへて
くるしくて鞨うちものふりあそてさせたくしくも
然なふまつらく おほくさそて 神田の境を押なえり
つまうちにかのあうけの場に入まゐて乙女子田楽の
かしおほゐくなて床几にほけし衆徒を社勢のむ
ふおなつききてるかまつりみて高子地の扇をさしうち
ゐくさうし招くとみれは長刀をかれおきよ身を横
さま手綱をふさぎに足をちともにきちり高
社勢のかうへ袴りまくまにわきへ袴りたへして長刀

つゐてきくとまそりいてまち給たけく申しけれはあらき世
るまさひの御つゝきしりてさるかくふかくは敵下
にあらはえもいふはましように昔ふりし源氏のみしう
なんをりしかうやう給わさふるしひしく堺の城と
もへ志川しと志そさいかくらんの将の出立志へるか
きとりをうちものをまろさへもち八太刀をひさけ
御ひさひ出てきとりく　おのましともれそちをまく兌
ふさらくりまて志めしてうち志とへてさらへうちひ
らさいてやかくらそと津をのみくかまふ令使さらへ
さと告きハいちと給ふときさを帯り太刀長刀おふりて
おかくりに入みされおけしおそれしといとまちかふ

玉杖の雲を宮殿に簇して此うちの巌をくさくち
とく鯨波ハ松風にまくへて沖浪の岡へよせ原かくて
うさうち源氏くしておりかくのそちともうち
まけて引色たちぬるをやをちやらしと孔を追な
うしに魔おゝを津て唐とうのかくへ追ぬさ又追之
しては原にて去かふきとやうち給へきもふくきくり
かへきのうにうちやみて説をきてねかくらよ人く
あるかさりまちをさゝ兌て志そさ出れともろく人も
春ちらえて松風にとせの変にかへて簫孤とまみりより
苗とるをの声とかを感るてふ奇孫母のはしきふをそて
あへてみようりるに此場にるさかくつくをはきる田子うるま

ことしいつち行暮んかも

折箏銘

寥松

しら琴は枕にありけるむかし声に鏘きあまに結ひて
きえうしく眺めにちりしと見えまつれ出ちやうに地にきぬ
貌なるうれしくして極まりられもなかく手にもとまゝ之
うつは心にもとめかく作ん云はれさ中まかへし
ころまゝ一元四千五百歳の春秋も瞬くおかにすぐる
ことく思ひなさらいうたに久しともをろしともいへ琴
なりめてたく清きものはあらし家業の戸に
鄰家のかくらひ名さ名つりて琴丸とよふいたゆる
角調八尺四寸なるものをなかきに縮め遙き一條折
箏なり菊布明かかられに成て終に琴の一字を鷹か
峯太虚庵の墨跡を拾ふて雕る憾らくさ五つの
爪響とらしして十二の洞庭甚妙おありかなし
されともおのつうういとに声をたてる響をいふへく
みもかくそうしもや弾くかしかとさらくとしてんの
あけまれるを知らくるはなかしさむら上手おかる
琴に御としくて卿もきこなさを聞させるかめ怨よ
かくさ名つけよふみそ皆等はちたき妙み等にも
清くして味ふし今日の情にかなふとはせん

何かしも以へまなかりしひに花を好めるまた夜の簀
撻なづらんよりも猶またはしらわちきさなくて
吾にわくをりしたうちも破るへく思ひつくも
さまろに捨るゝこそおろかにも無慙なれ假令
弾ともんを咲かし何ものにまきをしてあら
しむるや、

猾鳥辞

蟹守

斥鷃を九霄の鵬を羨も甲に似合て穴
をわる鳥を流るゝのまゝにもおくれ喰へ魚して

さし出る流そむろ川けなきさかの梅わち匂ひ出わ
露むまの秋も不月西の晴間わやなくさ
秋も秋の秋の月の明りけきうちもうら帰して蘭
閨錦帳の蔑をや好まも青楼の暁志らぬ鬢を驚
かし韻雲わ由ふへ出るを啞しくやさきりにふ祥を
帰て遠き境の人をもてはせ閨のなのそのすもむい
うしくわしぬおもひを抱き涸如雨と詠きしも実
さそあらんかしれうなあれハ貞観の帝ハ一枝に
かへて金樹に棲志めんとその青陵ひし掟る
来まさぬ君をころくとそ鳴とつけしハおしなま
めきまる人恍そせし涙翡の杏さなくも人の請を

まぬかれはわしき夕へとなく糞土の芥これを啄き
牛馬の腐肉を喰むときは黨をあつめ陣をなし
あるは市中に於て魚餅を掠ひ又は邑里の家根を
堀り小禽の巣をうはひあるは其振舞ひあしけれはかなへ
うとし能形檀現なりけりしかは林氏の鶴なとうへまし
きとかうもしかく汝の罪をせめ給も彼の斥鷃の
誇るもふるあらは誇るも汝を毛吹かる笑
ふとし筆をさしおく

嘉永六年癸丑冬十一月補刻

江都
發行
書房

日本橋南壹町目
須原屋茂兵衛

淺草茅町二丁目
須原屋伊八

同 茅町東中代地
野村新兵衛